

此山は當國一の大山なり、おもては佐久小縣兩郡へ跨り、裏は上野國吾妻郡也。本朝に燒る山數多あれども、かくの如きはなし、年中一日も燒ざる日なし。大燒は三四年に一度ありて、其時は千雷万雷の如く、巨木をぬきて谷に横たへ、大石を飛して空にひるがへる。其煙幾万仞といふ事なく立のぼり、其煙崩れ倒るゝ時、半天より亂火を降していとすさまし、煙西へなびきかへるを凶とす。常は東へなびき倒るゝ其下は燒たる砂石を降する事、益をくつがへすが如し。四月八日巳の刻迄に、諸人精進して是に詣ず。午の時に及べば燒出る事あり、よつて詣る事あたはず、宿を宵に出て巳の刻に及て下山するなり。

〔伊勢物語上〕むかしをとこありけり、京やすみうかりけん、あづまのかたにゆきてすみ所もとむとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり、しなの、くに、あさまのだけにけぶりのたつをみて。

〔後撰和歌集離別〕亥なのへまかりける人に、たきものつかはすとて、
しなのなるあさまの山ももゆなればふじのけぶりのかひやなからん
〔中右記〕天仁元年九月五日、左中辨長忠、於陣頭談云、近日上野國司進解狀云、國中有高山、稱麻間峯而從治、曆間峯中細煙出來、其後微々也。從今年七月廿一日、猛火燒山巔、其煙屬天、沙礫滿國、燐燼積庭、國內田畠依之已以滅亡、一國之災、未有如此事、依希有之恠、所記置也。廿三日、今日午時許、有軒廊御卜、上卿源大納言、後上野國言上、麻間山峯事。

〔頑鼠漫筆〕淺間山の火

抑此淺間山は、信濃國佐久郡と、上野國吾妻郡とに跨り、兩國の界にては、最第一の高山なり。されば先年、文化の頃か、國人互に自國の山といふ諍ひ出來て、おほやけに訴へければ、實檢使を